

れき じん

# となん歴史民だより vol.52

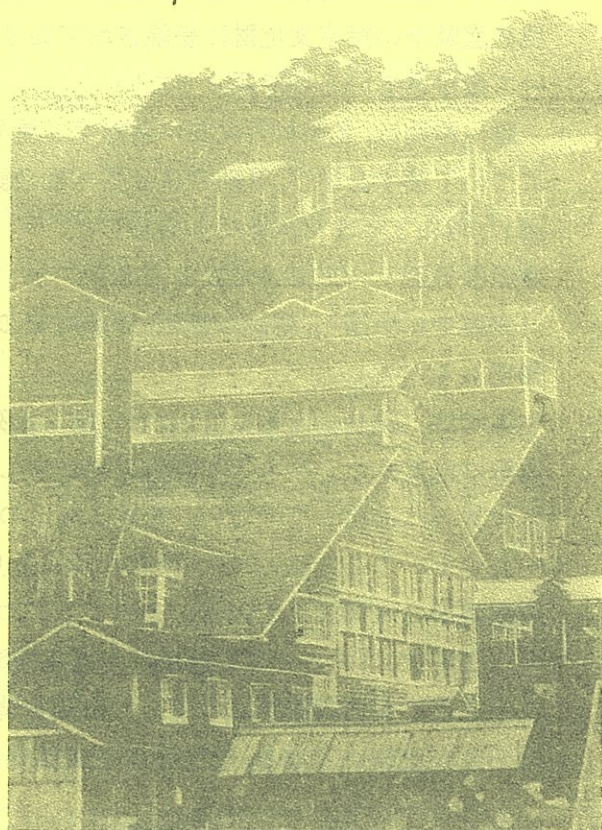
Morioka tonan history and folklore museum

平成29年9月30日発行

発行 盛岡市都南歴史民俗資料館 盛岡市湯沢 1-1-38 Tel/Fax 019-638-7228



企画展「山のチカラ 大萱生鉱山」  
平成二十九年十月二十一日(土)～十二月十七日(日)

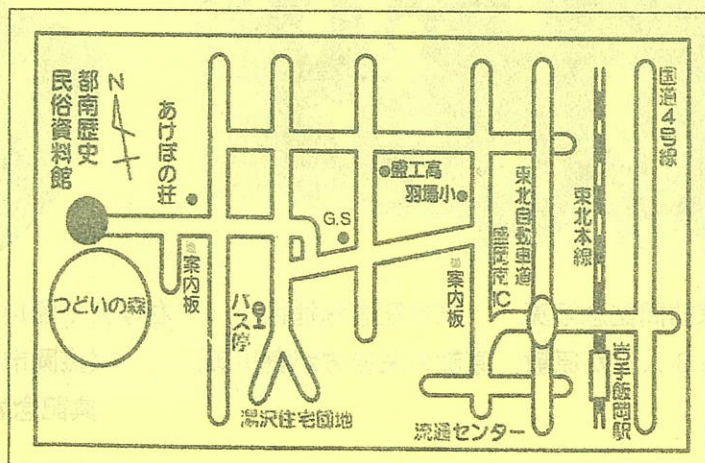


## 是非ご来館ください。お待ちしております。

### — もくじ —

- 原敬と藤川清助
- 企画展「読んで、書いて、寺子屋で！」終了報告
- 次回企画展のご案内
- 資料は語る②
- 盛岡市所在  
指定・登録文化財紹介②
- となんの昔ばなし②

### MAP☆ACCESS



### ○利用案内

#### 開館時間

午前9時から  
午後4時まで

#### 入館料

無料

#### 休館日

月曜日  
(休日に当たるときは、直近の平日)、  
年末年始



## 原敬と藤川清助

盛岡市都南歴史民俗資料館 館長 小沢 一昭

原敬は、盛岡・岩手ひいては東北が生んだ偉大な政治家である。幼くして父を亡くし、母親の手で育てられたが、後に総理大臣にまで上り詰めた。爵位を持たなかったため、平民宰相とも呼ばれた。総理大臣になって3年あまり、東京駅で18歳の中岡良一（こんいち）という少年に暗殺された。原敬は19歳から暗殺される65歳まで日記を書き続けた。それは、「原敬日記」として残されており、現在盛岡市の指定文化財に登録されており、大切に保管されている。その日記の中に、藤川清助について書かれているので紹介したい。

藤川清助は、見前村西見前の素封家で屋号「菖蒲田（あやめだ）」の藤川家に生まれる。宮崎求馬について漢学を学び、見前の農会長・郡会議員、見前村長等を務め、大正14年には衆議院議員に当選し、昭和3年まで政界でも活躍した。

### ◆原敬日記 大正4年10月9日

「大慈寺に参詣し、帰途川原町、仙北町等の有志より招待され見前の藤川栄助方に赴き午後5時半に帰宅し・・・」

当時は「栄助」と称していたが、厳父が死去するや襲名して「清助」と称するようになる。当時、原敬は政友会という大きな組織の総裁をしており、大変忙しい日々を過ごしていた。その時清助はまだ政界へは進出していない。議員になるのは原敬が暗殺されて、その4年後である。わざわざ個人宅へ赴くということは、よほど緊密な関係と見てよいのではないか。しかも写真には政友会所属の衆議院議員が2名同席している。そのことについて、昭和5年発行「岩手県名士肖像録」の「藤川清助」のところで、「・・・曾て原敬氏生前菖蒲園に遊び君（清助）に立候補を懇懇（しょうよう）されしことありしが時期尚早なりとして出馬を肯ぜず・・・又大正14年清浦内閣のとき、終（つい）に選せられて代議士となり、政友会岩手支部幹事となり・・・」とある。



左写真：見前村藤川家訪問記念写真 原敬記念館提供  
（前列左から3人目が原敬。原敬の左後方が藤川氏）



右写真：藤川清助 原敬記念館提供  
（盛岡市先人記念館所蔵「御大典記念岩手縣名士肖像録」）



もう一箇所、原敬日記の中に清助が出てくるところがある。それは原敬が母親リツの米寿のお祝いをした時、招待客の一人として呼ばれている。(当時は、まだ栄助と名乗っていたと思われる)

◆原敬日記 明治43年6月3日(お祝いは、5月21日からおよそ一週間続く)

「26日 高村喜代助、長内庄七・・・・鈴木巖、藤川栄助を前日通り余と兄兩名にて晚餐に招待したり・・・・」

このことから、原敬が早くから清助の実力、人望を見抜いていたのかがわかる。その後、清助は昭和17年74歳で亡くなるまで、地方自治や産業の発展に多大の功績を挙げたのである。

## 企画展「読んで、書いて、寺子屋で！」終了報告

当館では、平成29年7月22日(土)から9月10日(日)まで企画展「読んで、書いて、寺子屋で！」を開催いたしました。本展では、当館が所蔵する江戸～明治時代初期の寺子屋で使われた往来物と呼ばれる教科書を紹介し、江戸時代に最も普及した庭訓往来をはじめ、生業に必要な内容が記された百姓往来、塵劫記などの和算、女子教育に使用された女大学などの資料を展示しました。また、寺子屋で学ぶ子どもの姿勢を示した「寺子式目」、漢字を歌で覚えるための「小野篁歌字尽<sup>おののたかむらうたじづくし</sup>」、日常の単語のほかに盛岡城下の地名が記された単語帳「文字尽」など、当時の寺子屋で使われた往来物が都南地域にも数多く残されていることが分かりました。本展の展示資料の一部は、本館展示室にて展示しております。

## 平成29年度 次回企画展のご案内

### 企画展「山のチカラ 大萱生鉱山」

当館では、平成29年10月21日(土)から12月17日(日)まで企画展「山のチカラ 大萱生鉱山」を開催いたします。大ヶ生では、大萱生氏支配の時代から採掘が行われていたと伝わっています。明治36年(1903)、秋田県の細川寅吉による探鉱を契機に、県内外の経営者による採掘が進められ、大正5年(1916)には住友総本店(同10年、住友合資会社へ改組)により買収されました。昭和10年(1935)の製錬所完成により、同16年(1941)にかけて大萱生鉱山は最盛期を迎え、水沢(現奥州市)

出身の斎藤實も同鉱山の視察に訪れています。

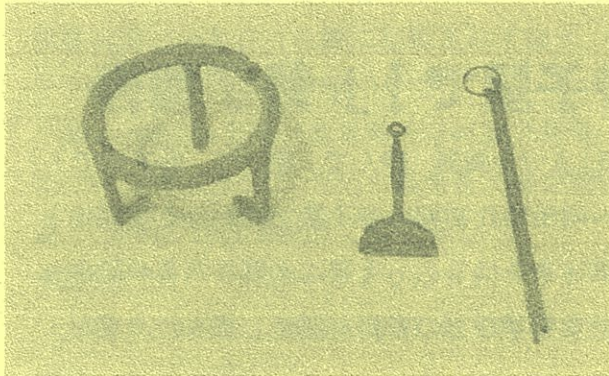
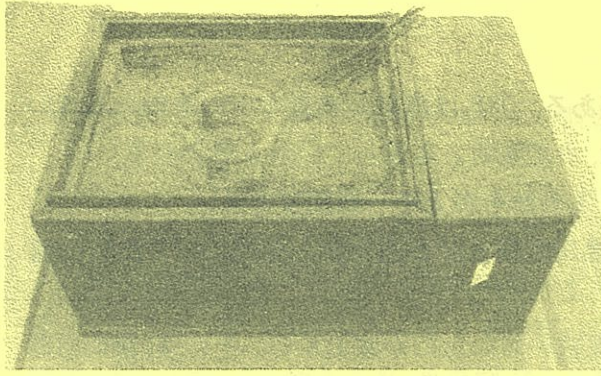
本展では、大正から昭和期における大萱生鉱山の資料を中心に展示し、最盛期の鉱山の発展と、それを支えた大ヶ生地域について紹介します。

写真：住友大萱生鑛業所 製錬工場配置之図

(縮尺100分の1) (当館保管)







左から、五徳・灰ならし・火箸

【長火鉢】

資料は、市内本宮で大正時代～昭和47年(1972)まで使われていた長火鉢です。移動可能な暖房器具で、五徳の上に鉄瓶を乗せるとお湯を沸かすことができます。また、灰をならすための灰ならし、炭をはさむ火箸も使われました。

市指定無形民俗文化財



山岸獅子踊

山岸地区に伝承される獅子踊りで、南部氏が甲斐から奥州に来たときに随行していた舞師の型が原型と伝えられています。太鼓踊り系に分類されますが、歌い手と笛が別についています。黒い角の牡鹿(おじしこ)が太鼓を持ち、小さな角の牝鹿(めじしこ)を囲んで踊る場面が特徴的です。盛岡八幡宮の神輿渡御に露払いとして御供しています。 参考文献:

盛岡市教育委員会『もりおかの文化財』(2008)、盛岡市無形民俗文化財保存連絡協議会「盛岡の民俗芸能 獅子(鹿)踊り」

『法領神社にまつわる伝説・後編』となんの昔ばなし五十二

現在の社殿は、昭和十二年(一九三七)に改築されました。その改築資金にするため神社の側に建っていた大きな杉の木を切って売りました。このとき散らばった杉の皮が、夜になると発光してみえるため、周辺の人たちが寄って見たそうです。

神社の神様は蛇を使いにしている、という言い伝えがあります。神社の周囲では、よく青大将を見かけることがあり、「殺してはならない」と言われていました。昭和十三年頃、私が母と二人で肥料桶を担いで神社の側の畑に向かう途中でひと休みしていると、ザワザワという音が聞こえてきました。タモの木を見ると、大きな大きな二匹の蛇が枝をつたっていました。きつと、その蛇こそが神様の使いだったのでないかと思われます。その後、このときほど大きな蛇が神社で見かけられたことはありませんでした。

出典『となんの民話』

(都南歴史民俗資料館、

一九八八)

